

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫



◆◆◆ No.0838 ◆◆◆

25/04/30

【 4 月は今年一番の「大変動」、5 月も「大相場」は続くのか 】

4 月は本日が最終日。つまり、まだもう一日営業日が残っているものの、4 月の月間変動幅は 10.6 円 (139.89-150.49 円)となり、今年最大の月間変動を記録している。

4 月 2 日付けの当レターでも報じたように、足もと 4 月の変動は非常に重要。何故なら、3 月の月間変動はわずか 4.75 円で、年明けから 3 カ月が経過した段階とはいえ、今年最小変動となっていたからだ。「2 カ月連続の小変動」となるか否か、今年のメルクマールになると予想していたが、見事今年一番の大変動を達成した。そして、そんな 4 月相場を受け、今度は来 5 カ月相場が「2 カ月連続の大変動」となるかどうか改めて注視されている。

◎ただ、経験則では近年の 5 月相場は「小動き」多い

先週もレポートしたように、今年のドル/円相場はザックリ「年初高・現在安」の様相。そのなかで、約 19 円ものドル安・円高がすでに進行しているわけだが、月ごとに見た「変動幅」そして「変動率」はやや鈍い。実際、前者を振り返ると 1 月の月間変動が 5.16 円で、2 月は同 7.32 円とややヤル気をみせたが、3 月は今年最小の同 4.75 円にとどまっている。また 3 カ月平均でも同 5.70 円ほどの変動だ。

そのため、先でも取り上げたように筆者は 4 月 2 日の当レター、「4 月の月間見通し」で「非常に重要な 1 カ月になる」と指摘していたわけだが、見事期待に応えた動きとなった。

そうした背景として、いわゆる「トランプ関税(米相互関税)」があることは言うまでもない。日米間の為替も相場変動要因になったことは間違いない。いずれにしても、果たして 4 月に見せた「大相場」は果たして一過性のものなのか、それとも 5 月も続くのかは大きいに気になるところと言えよう。

もちろん、最終的には「神のみぞ知る」ところながら、就任から 100 日が過ぎたトランプ米大統領の支持率が大きく低下。それもあってか、先のトランプ関税については修正の動きがたびたび観測されている。そして為替問題についても、少し予先が和らいできた感じがしないでもない。つまり 5 月は、4 月とは別の意味、米国による「締め付け」ではなく、一転しての「緩和姿勢」が金融市場そして為替相場においても波乱要因となる可能性がありそうだ。

さて、上記のような状況下、以下では恒例となっている過去の経験側を参考にした来 5 月相場の見通しを指摘してみたい

まずは 1990 年以降昨年まで過去 35 年間の星取表を指摘すると 18 勝 17 敗となっている。ほぼ互角の結果であり特徴とは言えないようだ。

しかし、4 月相場と 5 月相場、単月ではなく 2 カ月続けてみた場合、興味深い事象がうかがえる。それは、「4 月相場と 5 月相場は逆方向に動くことが多い」で、調べてみると 2015 年以降 2022 年まで 8 年連続でパターンに合致していることがわかった。2023 年は残念ながら 4 月、5 月とも「ドル高」で方向性は一致。パターンから外れたものの、昨 2024 年は再び「逆方向」のパターンに回帰した。今年は果たして如何に!? ちなみに、今年 4 月相場のドル/円は 150 円前後で取引を開始しており、そののち昨年 9 月以来となる 139 円台まで下落していることは周知のとおり。本稿執筆時のレベルも 142-143 円台での推移だ。よって、仮に来 5 月相場が逆に動くとなれば、「ドル高・円安」有利ということになる…。

また、それとは別の 5 月相場の特徴を調べてみると、昔は「年間を通してかなり荒れ模様の展開を辿ることが少なかった」のだが、近年は逆に「動きの鈍い」展開が目につく。

幾つか例を挙げると、2020 年は月間変動幅がたったの 2.10 円。翌 2021 年も同 1.86 円で年間を通し最小変動幅だし、2022 年の月間変動幅は 4.99 円に過ぎない。また、2024 年も月間変動幅は 6.12 円を記録したが、大きく動いた月が全体として多かったことで年間 10 位の「小変動」だった。先で指摘したように、筆者もいち市場参加者として「2 カ月連続の大相場」を期待したいところだが、経験則的には逆の結果が示されていることが残念でならない。

一方、過去の事象、ニュースなどを振り返った場合、5 月は国際的な重要な出来事が多発しているものの、

